

令和元年6月26日現在

機関番号：13601

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2018

課題番号：16K13163

研究課題名（和文）ドイツにおけるトルコ系移民の音楽とその伝承

研究課題名（英文）Musical Transmission among Turkish Immigrants in Germany

研究代表者

濱崎 友絵（HAMAZAKI, TOMOE）

信州大学・学術研究院人文科学系・准教授

研究者番号：90535733

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,000,000円

研究成果の概要（和文）：ドイツに定住するトルコ系移民たちは、1960年代以降、各地にトルコ・コロニーを形成するとともに、文化社会的自助組織であるデルネッキ（協会）を設立し、トルコの「伝統音楽」をはじめとするトルコ文化を次世代に受け継いできた。ではドイツ社会においてトルコ系移民の人々は、自らの音楽やその「正統性」をどのように捉え、いかにして次世代に伝えていこうとしているのか。本研究は、とくにトルコ民俗音楽がドイツ社会の中で再編され、伝承され形づくられていく一端を現地調査を通して明らかにし、ディアスポラ下における文化接触と変容の問題を検証することを目指した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、現地調査を通してドイツのトルコ系移民の間において「伝統音楽」、とくにトルコ民俗音楽の教授の実態が、西洋音楽（およびその教授法）を強く意識した音楽教師側の個々の「選択」によって成立する傾向があることを明らかにしている。これは今後ドイツという地でトルコ民俗音楽が質的に変容を遂げる可能性を示唆するものである。これまでディアスポラ下にあるトルコ民俗音楽の伝承メカニズムを主軸に据えた研究はきわめて少なく、今後、さらに研究を深化させることによって、音楽領域から移民文化構築メカニズムを解明するためのモデルケースを提供できると期待される。

研究成果の概要（英文）：People from Turkey have been migrating to Germany since the 1960s and are one of the largest immigrant groups. They have formed Turkish towns and established socio-cultural associations called dernek in various areas in Germany. Over the years, they have passed down their music such as Turkish classical music known as Ottoman music, and folk music, from one generation to the next. As a result, the 'authentic' culture and music related to their homeland has become an important aspect of their identity. The question that arises is, how have the Turkish immigrants transmitted the music to the younger generation? This study attempts to explore the transmission and transformation of 'traditional' culture and music among German Turks from a new perspective. It attempts to address the question with a focus on the methods of teaching and learning Turkish folk music at three of the music institutes that are located in Dortmund and Berlin in Germany.

研究分野：音楽学

キーワード：音楽伝承 トルコ系移民 ドイツ トルコ民俗音楽

1. 研究開始当初の背景

第二次世界大戦後、戦後復興を担う労働力としてドイツに受け入れられたトルコ系移民は、今やドイツ最大のエスニック・マイノリティとなった。現在のドイツにおいて「移民の背景をもつ住人」のうちトルコ系移民の割合は約 150 万人となっており、ベルリンなどトルコ系移民が集中する地域ではトルコ料理屋が立ち並び、トルコ語が飛び交うトルコ・コロニーが出現しトルコ音楽が日常化する移民空間が生み出されている。

こうした時代背景の中でドイツにおいては、1990 年代にはドイツ系トルコ人のラップが、さらに 2000 年代にはトルコ・ポピュラー音楽であるアラベスクと R&B が融合した「R&ベスク」などハイブリッドな音楽ジャンルが生み出されてきた[Kaya: 2002、Stokes: 2003、Greve: 2006、濱崎: 2014]。しかし一方で、同じ「トルコ音楽」でありながら、トルコ古典音楽(オスマン音楽)やトルコ民俗音楽などの「伝統音楽」は、ベルリンをはじめ各地のトルコ文化センターやデルネッキ(協会)などで組織的に保護、教授される状況がある。

近年の音楽学領域は、グローバルネットワークやメディアを介した多様な文化の混交に目を向けがちであったが、一方でこうした支配的なシステムに収斂されずに自発的に「自らの音楽」を伝え、維持しようとする人々の音楽実践には、現在のディアスポラが抱える伝統/再編の問題が集約されているともいえる。ではドイツ社会においてトルコ系移民の人々は、自分たちの音楽をどのように捉え、いかにして次世代に伝えていこうとしているのか。こうした問題意識を出発点として本研究は、トルコ系移民の人々の音楽がドイツ社会の中で再編され、伝承されていく現状を、社会学的調査と民族学的フィールドワークを通して検証することを目指した。

2. 研究の目的

本研究が目指すところの「ドイツにおけるトルコ系移民の『伝統音楽』の伝承実態の解明」という語りには、そもそも石川が指摘するように、ドイツ国内に居住するトルコ系移民の人々自身が保持する「トルコ人」「ムスリム」「ドイツ社会成員」といった複層的なアイデンティティにかかわる問題 [石川: 2011]に加え、オスマン音楽(トルコ古典音楽)やトルコ民俗音楽などトルコの「伝統音楽」にかかわる口承性や正統性の問題が内包されている。またさらに音楽伝承の具体的なプロセスという観点から言えば、祖父の地の音楽伝統と空間的、時間的に切り離された異地で、無数にある音楽様式の中から「どの音楽」を持ち込み、それを「どのような形」で提示し、そして「いかに」伝え、受け取るかという「選択」の問題が横たわる。つまり「ドイツにおけるトルコ系移民の『伝統音楽』の伝承」を検討することは、ドイツおよびトルコ両国を包摂する形で、人と音楽をめぐる社会的、空間的、時間的連鎖を読み解き、この交差をトルコ系移民の「心性」を加味して考察することが求められるといえよう。これまでドイツにおけるトルコ系移民の「伝統音楽」に関しては、宗教的、政治的にデリケートな問題と関わるためか両国の音楽学者によって積極的に取り組まれてきたとは言い難いが、その理由には、こうした幾層もの複雑な背景が関係してきたと考えられる。

上記の問題を検討するために本研究は、その足掛かりとしてトルコ系移民の「伝統音楽」の中でも、これまで報告者が調査対象の一つとしてきたトルコ民俗音楽[濱崎: 2010、2016]を主たる研究対象として射程を絞ることとした。その上で、トルコ民俗音楽の伝承実態を移民内部の視点から調査し、トルコ系移民の間の音楽伝承メカニズムの一端を検討することを第一義的目的に掲げた。またこれは従来、音楽学が文化接触や音楽変容として捉えてきた文化混交による現象を社会学などの他領域へ接続させ、新たな視座を得るための試みともなる。

3. 研究の方法

上述した研究目的を達成するため、当初、主たる研究対象として設定したのが、1993 年に設立されたドルトムントのトルコ教育センターでの音楽伝承の実態調査であった。同機関はトルコ政府関連組織として、これまで約四半世紀にわたり、おもにトルコ系移民の子供たちを対象にトルコの伝統的な音楽や舞踊などの教授をおこなってきており、トルコ系移民の音楽伝承をめぐる実態や葛藤が集約された象徴的な「場」として位置けられる。そのため当初の研究計画においては、ドイツにおけるトルコ音楽関連団体の情報収集と整理、ドルトムントのトルコ教育センターにおける実態調査、同センターにおける伝承メカニズムの解明、の三つの観点から調査をおこない、さらに当該地域や音楽に関する実証的な文献研究を組み合わせる検証を進める予定であった。しかし研究期間中の 2017 年に同機関での実地調査直前に、トルコ教育センターの音楽教師が退職する事態が発生したことで、音楽教授の参与観察が叶わない状況となったため、研究対象および研究計画を再検討し、上記からこの観点は保持しつつ、研究対象をベルリンにおけるトルコ系移民の音楽教授組織にまで拡張して調査をおこなう形で軌道修正を図った。

こうした経緯を経て本研究は、(1)文献資料を基盤としたドイツにおけるトルコ系移民の社会的、音楽的変遷の整理、および(2)現地調査(ドルトムント、ベルリン)に基づく教授実態の検証という大きく二つのアプローチを組み合わせる手法をとることになった。なお、(1)においては、おもに 1960 年代から 2000 年代に至るドイツのトルコ系移民の社会的、音楽的動向とその諸相を一次資料および先行研究を基盤に整理をおこない、(2)現地調査においては、

トルコ教育センター(ドルトムント)、トルコ音楽のためのコンセルヴァトワール(ベルリン)、サズ・エヴィ(ベルリン)の三つの教育機関においてインタビュー調査を含めた質的調査を通して検証と考察をおこなうこととした。以下の研究成果の報告においては、上記(1)および(2)の観点から概要をまとめていくこととする。

4. 研究成果

(1) 文献資料を基盤とした歴史的、社会的、音楽的経緯の整理

(1)-1 ドイツにおけるトルコ系移民をめぐる歴史的、社会的背景

現在のドイツは、EU域内ではフランスやオランダとも並ぶ「移民大国」となっている。1950年代以降、第二次世界大戦の戦後復興を担う労働力として西ドイツに流入した外国人は、「ガストアルバイター(訪問労働者)」と呼ばれ、ドイツの経済復興を支えていった。こうした外国人の多くは、ドイツ人労働者が敬遠するような比較的低賃金の単純労働をになう「一時的労働者」とみなされており、「ドイツ民族 Deutsches Volk」という血統主義を国家建設の原理を前に、「外国人/他者」として厳然と区別をされてきた[石川：2012]。

トルコ系移民が現在のようにドイツ最大のマイノリティとなる端緒は、上述したように西ドイツが外国人労働者受け入れに積極的な政策を展開したことに起因する一方、トルコ国内情勢とも連動していた。トルコでは1950年代から1970年代にかけて、政情不安、都市と地方の格差、近代化と失業率の高まりにより、国内移民と国外移民の急激な流れが生み出されており、この期間のトルコ人のドイツへの移住者数をみると、1950年の段階では、わずか1,300名ほどであったが、1961年には約6,700名、十年後の1971年には652,800名にまで急激に増加している。

こうしてドイツに渡ったトルコ系移民の人々は、音楽を一つの「心の拠り所」として位置づけ、故郷への郷愁や辛い自身の境遇を音楽に重ねてきた。1960年代から90年代にかけてのドイツにおけるトルコ音楽の潮流は、グレーヴェによれば以下の大きく四つの傾向をもっていたとされる[Greve:2006]。1960年代から70年代の移民流入期にかけてはアナトリアの民俗音楽が好まれ、1973年から80年代にかけての家族呼び寄せ期にはトルコのポピュラー音楽(とりわけアラベスク)が流行した。さらに1980年代から90年代の定住期にはトルコの古典音楽が、そして1990年代以降の移民第三世代に入ると、多様なジャンルをフュージョンさせたポップ・ミュージック(とくにラップやヒップホップ)が積極的に受容されるようになる。ただしこうした音楽ジャンルは時代によって移り変わるというよりは、受容の強弱はあれ、並行してトルコ系移民の間で鳴り響いてきたとみる方が妥当であろう。

本研究では、上記の区分でいうところの初期、第一世代が支持したアナトリアの民俗音楽の、現在における教授実態とその伝承メカニズムの一端を検討するため、以下の三つの音楽組織において参与観察を含めた現地調査をおこなった。

(2) 現地調査(ドルトムント、ベルリン)に基づく教授実態の検証

(2)-1 トルコ教育センター(ドルトムント)

トルコ政府関連組織の一つとして1993年にドルトムントで設立されたトルコ教育センターでは、同センター所長によれば、2017年に至るまでのべ3万5千人のトルコ系移民の人々に対して言語(トルコ語やドイツ語)を含めたトルコ文化の教授をおこなってきた。現在センターには、約350名が所属しており、そのうち約300名が、トルコ文化の授業を受けている。センターで提供される授業内容は多岐にわたり、トルコ語やドイツ語の授業をはじめ、トルコ民俗音楽、トルコ民族舞踊、演劇、ピアノやヴァイオリン(ただし開講数はきわめて少ない)、ギター、エブル(Ebru、トルコのマーブル・アート)、裁縫や刺繍の授業が開設されている。

同センターではトルコ民俗音楽の授業の一つとして楽器のパーラマ(洋梨形の三コースからなる撥弦楽器)の授業が開講されているが、現在、受講者数は30名で、その数は同センターでトルコ民族舞踊を学ぶ150名から170名に比べて1/5~1/6と少ない。この理由を「受け手」側の立場から考察すると、いわゆるパーラマを学ぶことは単に演奏技術を習得することだけではなく、タウル tavır と呼ばれる奏法と結びついた種々の地方様式を学ぶことと深い関係をもつため、移民第三世代~第四世代の若者にとっては「土地に付随する音楽のaura」を想像し難く、結果的にアクセスが容易ではない音楽あるいは楽器になっていると考えられる。それに対して民族舞踊は、楽器を習得するより比較的、多くの年齢層にアクセス容易であると考えられ、さらに身体の同期が一種の共同体意識を醸成する点で好まれていると推察される。以上の観点からトルコ教育センターでは「音楽—身体」の結びつきが重視されていると指摘することができる。

(2)-2 トルコ音楽のためのコンセルヴァトワール(ベルリン)

ドイツ最大の都市ベルリンは、人口約357万人で、そのうちトルコ系移民が約10万人を占め、国籍別にみたベルリンの外国人集団の割合はトルコ人が最大となっている。このベルリンの地に設立された音楽組織の一つが、トルコ音楽のためのコンセルヴァトワールであった。ド

ルトムントのトルコ教育センターと異なり、同コンセルヴァトワールは私立の組織で 1998 年に創設され現在に至る。

同コンセルヴァトワールは、「トルコ音楽のための」と冠されているが、大きく三つのジャンルの音楽教育がおこなわれている。すなわち、伝統的なトルコ音楽（民俗音楽およびオスマン音楽）、トルコ民族舞踊、そして西洋音楽（ピアノ、ヴァイオリンなど）である。

報告者は上記の開講授業のうち、民俗楽器パーラマの個人授業および民俗音楽合唱の参与観察をおこない、教授実態を確認した。その中で判明したことは、どの授業においても五線譜への比重が極めて大きいということであった。これまで報告者はトルコにおいて、デルネッキや音楽アカデミーなどでトルコ民俗音楽合唱の授業に参加してきたが、五線譜の使用はあくまで参考程度であり、ほとんどの参加者は五線譜が読めず、歌詞のみを参照して歌っていた。教師も五線譜に頼ることはほとんどなく、厳密な音価を求めることはけっしてなかった。それは民俗音楽が口頭伝承の「可变的」な音楽であるためでもある。しかし今回、同コンセルヴァトワールで展開されていたのは、民俗音楽の典拠を楽譜そのものに求めるものであった。勿論、このような教授形態が、ドイツにおけるトルコ民俗音楽の一般的な形なのか、あるいは音楽教師一人の判断によるものなのか結論を急ぐことはできないが、少なくとも、「口頭伝承としてのトルコ民俗音楽」という性質が弱められていた実態が明らかとなった。

(2) - 3 サズ・エヴィ (ベルリン)

さらにベルリンにおいて調査をおこなった音楽組織がサズ・エヴィ（「サズの家」）である。同組織は「音楽教育センターおよびパーラマ学校」とも位置づけられており、2005 年に設立され、現在、約 70 名の会員を有している。

報告者は同組織においても民俗音楽合唱の教授現場にて参与観察をおこなった。そこで判明したことは、民謡を歌う前段階の「声づくり」すなわち「美しい声」が目指されていた実態である。「美しい声」とは「全員が同じ高さ、同じテクスチャーの声」での合唱と言い換えてもよいだろう。このサズ・エヴィで試みられていることは、西洋音楽のベルカント唱法をも意識した「声づくり」であると考えられ、トルコ民謡の伝統的な在り様と異なるベクトルでのトルコ民俗音楽合唱の「美しさ」の追求が試みられていると言える。ちなみにトルコにおいて民俗音楽合唱は、合唱を「楽しむ」というよりもむしろ、レパートリーを獲得するための一つの手段としての位置づけられている側面が強い。「合唱」という形態そのものが標準化をア priori に求めるものであるため、トルコ人は口々に、「民謡は独唱で楽しむもの」と言い、トルコ民俗音楽合唱という形態そのものに独唱と同じレベルでの「美しさ」を期待することはほとんどない[濱崎：2004]。サズ・エヴィで試みられていることは、先述のトルコ音楽のためのコンセルヴァトワールとはまた異なるベクトルでの「西洋」を意識した、民謡をめぐる「身体」と「美」の「再編」であると言える。

以上の調査から明らかになりつつあるのは、とくにトルコ民俗音楽の教授の実態と教授レパートリーが、西洋音楽（およびその教授法）をきわめて強く意識した音楽教師側の個々の「選択」によって成立する傾向があるということである。五線譜に依拠したりベルカント唱法を意識した発声法を伝授する光景は、トルコではまず見られない景観であり、ドイツという地でトルコ民俗音楽が質的に変容を遂げる可能性を示唆するものとも考えられる。民俗音楽は口頭で伝承されてきたがゆえに、常に「変形」をとまなうものである。しかし一方で、極端な西洋化は、民俗音楽の「正統性」の議論に深い亀裂を生み出す可能性が指摘される。

上記の詳細は、拙稿「ドイツにおけるトルコ系移民の音楽伝承にかかわる調査報告——ドルトムントとベルリンを例に」（2019 年）において整理、報告をおこなった。また間接的に関連するものとして拙稿「感性を『統合』する— 国民音楽からトルコ民俗音楽へ」（小笠原弘幸編『トルコ共和国 国民の創成とその変容 アタテュルクとエルドアンのはざままで』九州大学出版会、2019 年）においても上記の点について言及をおこなっている。

以上をふまえ、最後に今後の課題を挙げておきたい。

これまでの調査においては、トルコ系移民の「伝統音楽」伝承の実態の一端とその特徴は明らかにしつつあるものの、祖国から離れた地で音楽が再編されるメカニズムについては解明に至っていない。そのため以上の現地調査から見てきた(a)教え手（教師）の「選択」、(b)受け手の「タウル」などの暗黙知の「習得」、(c)トルコ民俗音楽の「正統性」の担保、の三つの観点からそこにかかわる人々の感情や記憶、心性を加味し、トルコ・コミュニティ/ドイツ社会の文脈にこれらの観点を位置づけることで、現代ドイツ社会におけるトルコ民俗音楽伝承メカニズムを読み解くことを目指したい。これらの作業を通して、将来的には社会学や文化人類学に接続し得るディアスポラ下における文化接触や文化変容のメカニズム解明に関わる新しい視座を提供できると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

濱崎友絵、「ドイツにおけるトルコ系移民の音楽伝承にかかわる調査報告——ドルトムントとベルリンを例に——」信州大学人文科学論集 第 6 号（通巻 53 号）2019 年 3 月、33 頁～48

頁。(査読あり)

〔学会発表〕(計 件)

〔図書〕(計 1 件)

濱崎友絵「感性を『統合』する－ 国民音楽からトルコ民俗音楽へ」小笠原弘幸編『トルコ共和国 国民の創成とその変容 アタテュルクとエルドアンのはざまで』九州大学出版会、2019年、73頁～96頁。

6. 研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号(8桁)：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。